

日本記者クラブ会報

記録版

■シリーズ研究会「テロと国際社会」①

伝わっていない

アフガンの人々の現実



中村 哲

ペシャワール会現地代表・
基地病院医療サービス院長

一九八四年四月からすでに十七年余り、中村医師は国境の町・ペシャワールを拠点に、パキスタン山岳地帯とアフガニスタンで貧民層のための医療に従事してきた。アフガンには現在カブールに五カ所、無医師・山岳地帯に三カ所の診療所を置いている。

現地の実情が伝わっていないのと、中村氏はこれまでのペシャワール会の活動をスライドで紹介、「時間をかけないと分かりにくい、行ってみないと分からない」アフガンについて、次の点を強調し、そこに住む人々の考え方を説明した。①われわれの住む社会とは全く異なる。攻撃に対する「復讐」とそれと反対の「客人歓迎」が、人間関係を律する世界である。②最も古風なイスラム世界で、近代的市民の視点からみればおかしいことも多いが、都市の原理主義を別にすれば、田舎の方はモスク中心の寛大でおだやかな掟社会である。

そして最後に「そうした人々が内乱を経て、いま前世紀以来最悪の干ばつと、米軍による空爆にさらされている。アフガンの人々の難民化をふせぎ、餓死者を出さずに冬越しができるよう活動していきたい」と語った。

久保文男（元共同） これから冬になるわけですが、現地は一体どういうような冬になるのか。いつごろから雪が降り、どんな温度になって、その間、一体住民たちはどうしているのか。

中村 ペシャワールは北緯三三度です。大体カブールも同じ位置です。アフガニスタンは山の中でして、カブールは盆地なのです。標高が千五百メートル以上ある。三三度というのは、西日本の緯度ですが、降雨量は日本の二百分の一という乾燥地帯です。水は、ヒンズークシ山脈に降り積もる雪でして、これが夏にとけて農業用水、飲料水を提供するということなんです。高地と低地とで大きい差がありまして、一般に人の流れは、冬は暖かいジャラバード、あるいはペシャワールの方に流れていく。夏は逆に、涼しい高地であるカブールの方、すなわち山地の方へ移動するというのが一般的な動きです。

大体寒くなってくるのは十月下旬、十一月、十二月、一月、二月というのが非常に寒い時期です。これも山岳地帯かどうかでずいぶん違

9ページ

質実剛健で用心深いフランス

山口昌子 産経新聞パリ支局長

います。山岳地帯では雪がもちろん降りますし、零下というのもめずらしくない。逆に低い方といいますが、ジャララバード、ペシャワールは夏が厳しい。私たちがいるペシャワールで、五二度というのがありました。ですから、夏はみんな高いところに移動することになるのです。

日本の四季に大体一致したサイクルです。十二月、一月、二月が真冬の真っ盛りです。カブールでは積雪がある。カブール市民は、十月中旬から十一月までに大体冬越しの食糧を蓄え、そして春を待つというのが一般的な生活なのです。これは高地の農村部でもそうです。

久保 冬は大体何度ぐらいになるのか。積雪は、首都で、あるいは平地で、あるいは山岳部で一体どのぐらいになるのか。また、人々がその場合通行できるのか、できないのか。

中村 地域によって違います。地域によっては積雪がない。氷結だけの場合もある。しかし、一般的に言って、氷結の程度は非常に強い。十一月ごろから氷結が始まります。大体三千メートル以上の地域では、氷結が十一月下旬から始まります。積雪もずい分地域差がありますけれども、多いところで数メートル、

少ないところでも数十センチということですよ。カブール市内は数十センチの積雪です。これが始まるのは大体十一月から十二月です。雪どけが始まるのが二月から三月ということですよ。

旗野寿雄（元朝日） 一つは、タリバンとの関係です。タリバンといわれる人たちが、先生がおっしゃった飢餓の問題に対して、どういうことをやっているのか。それから、住民たちはタリバン勢力に対してどういう感情を持っているのか。もう一つ、先生たちの医療活動グループは、タリバンとのコンタクトがあるのかないのか。それから最後に、アフガンでは貧富の差が極めて大きいとおっしゃいましたけれども、先生としては、その貧富の差の原因は何だと判断しているのか。

中村 非常にいい質問だと思います。タリバン、タリバンというけど、タリバンが何たるかというのを、みんなよく知らずに議論が進んでいるというのが現実であります。

タリバンと住民たちとの関係ということからまずお話しします。これは図式化していいですよ、アフガニスタンのあらゆる権力というのは、住民の支持がないと成り立たない。王制も含めまして、権力を受け入れるか、受

け入れないかは、各地の「ジルガ」という長老会次第なのです。この長老会が、この権力は受け入れるに値するか、値しないかということ議論して、そしてそれを迎え入れる。それを自分たちの親分としていただく、という形でアフガニスタンの権力構造というのは成り立つわけです。

逆にいいますと、みんなの支持がないと勢力が張れないという現実があります。例えばタリバンが出現したのは九四年です。カブールが占領されるのが九六年です。この間わずか二年です。二年間で国土の三分の二を制圧したのです。それもわずか一万五千人の兵力で。国土の三分の二を二年間で制圧するというのは、まずこの軍事力だけでは普通はできないことではないか。

アフガニスタンの権力構造をよく知らないで、みんな不思議がっていたわけですが、普通はタリバンが攻めていくと、受け入れるか受け入れないか、もちろん暴力でおどすこともあるでしょうが、大方はその地域の長老会が決定して、それを迎え入れるという形をとるのです。

今でさえ、タリバンがわずか二万、三万の軍隊で、あの広大なアフガニスタンの九〇%をおさめるというのは不可能に近いことです。これはおそらく皆さんが思っておられる

常識とは反対のことかもしれないけれども、タリバンというのは、そうやって人々に受け入れられた政権である、ということがいえるわけです。

こういうとなんですが、報道関係の方は、マスードとか北部同盟とのつながりが深い人が多いので、タリバンに対して反感を持っている人がかなりいるということもありまして、正確な実態はあまり伝わっていないというのが実情だと思います。

事実は、そういうふうな地区の長老会が積極的にこれを受け入れて、タリバンを支持するということと成り立っているわけです。だから、タリバンというのは、逆にいうと、言葉は悪いのですが、農村を基盤とする田舎者の政権という面が非常に強いのです。

ですから、タリバンが布告している政令などを見ますと、中には荒唐無稽なものもありますけれども、たいていは田舎の慣習法なのです。

ブルカ着用にしたって、女性自身がブルカを着ないと落ちつかないというようなことで、その着用令を出しても、われわれが一日に一度は必ず米のご飯を食べるようにということとを義務づけられるようなものです。ほとんどの人々にとっては抵抗がない。少なくとも、こういう宗教令については、行き過ぎの

ところについては、タリバン自身も含めて、タリバンといってもいろんな人々を含んでおりますけれども、タリバンの大部分を含めて、おかしいところはみんな「おかしい」と笑っているのです。

例えばわれわれがカブールに大量の薬品だとかを輸送するときに、うちの組織のマークは赤い三日月にハトのマークがかいてあるのですが、ハトの顔は偶像崇拜になると、途中でタリバンの宗教委員会の人というわけですね。「じゃ、どうするんですか。薬をどうやって届けたらよからうか」と。「いや、いい考えがある。ハトの顔にばんそうこうを張ってください」という（笑）。「これでいいんですか？」という、「まずそれでいい。それで問題ないから」と。この程度なんです。取り締まる役人の方も半分笑いながら、そういっているという状態なのです。まあ、例外的な行き過ぎもありますが、そういうのを除けば、おおむね田舎で行われている慣習法なわけです。

大変な貧富格差のあったところでした。一部の都市の富裕階級層は、あそこはわれわれ以上に西欧化していて、ミニスカートをはいたりとか、アフガニスタンの中でぽっかり浮かぶ島のような存在でした。そういう人たちが国連職員として、あるいは外国NGOの職

員として働き、当然、国を出ていくわけですから、こういう人たちの声がいらずに大きく伝えられた、という事実は否めないのではないかと思います。

それと、最近のタリバンというのは、もちろん北部との戦闘にも忙しかったのですが、比較的建設的な方向に向かっていたということです。

われわれのグループとタリバンとの関係ですけれども、私たちの基本姿勢はどんな政権とも癒着しないということです。等距離を置いてつき合う。それがゆえに十七年間の活動ができてきたわけです。今までもいろんな権力の変遷を見してきました。どの権力とも等距離でつき合うというのが、私たちの一つの大きなガイドラインです。タリバンともそういうふうな形で接触しております。どの権力にしても、どの住民にしても、一生懸命やることに対してはだれもが評価するわけです。そういうことで、タリバンについてのイメージというのは、われわれが持っているイメージと、日本でのイメージとはずいぶん違うということになります。

田井中雅人（ヘラルド朝日） まず日本政府が今回のテロに対して「難民支援」というのを打ち出しておりますけれども、具体的にど

ここで、何をやらねばいいとお考えになるか。もう一点、お話の最後で「あおられた対決の構図を崩したい」とおっしゃいましたが、その構図についてもう少し具体的に。

中村 一つは、難民支援の具体的な方法は何かということですね。これは難民をどう規定するかで違うと思います。現在でさえ、ペシヤワールで「難民は手をあげてください」というと、百万人以上の人が手をあげる。

どういうことかといいますと、まず、今度の大千ばつによる避難民がいます、それから、タリバン進駐以前、共産政権が倒れたときに迫害を恐れて逃げてきた人たち。それから、もう長い難民生活の間にそこで生まれ育ってほとんどパキスタン化している人たちもいます。こういう人たちを入れますと、百万人から百五十万人がペシヤワールにいる。

現在、問題なのは飢餓難民です。それから西側で予想されている、戦乱によってたまたま出されてくる難民ということだろうと思いますが、この二つの難民について絞ってみますと、飢餓難民は確かに少しずつふえてきておりませんが、国境を越える場合はもちろん食うために逃れてくるわけですから、普通、親戚のところに身を寄せる。

先ほどの話の中で「復讐法」と「客人歓待」

が現地の人間関係を律する基本的なものだといいました。もう一つの人々の絆は血縁地縁、これも非常に強い。部族の下氏族、氏族の下家族というのが非常につきりしております。日本でも昔は似たような状態だったのです。戦争直後、親戚が転がり込んできても、これは拒否できなかった。それと同じで同郷出身者が転がり込んでくると拒否できないということがありまして、食えない難民はまずそこに身を寄せる。

要するに、私がいいたいのは、いま大規模な難民支援をやりますと、アフガニスタン国内から、こういう人々をたたき出す結果になる。私は過去のアフガン戦争のときの難民キャンプの再現を恐れているわけです。支援が逆に難民化を促進する動きになってくる。難民キャンプができますと、そこで食えるから、われもわれもと出てくるということで、当然パキスタンはそれを嫌がっている。だから、パキスタンはそれを返す方向で今までやってきたわけです。

ですから、難民を出さない努力というのが一番ではないか。やむを得ない事情でやってくる難民というのはありますけれども、これは数が少ないものです。わざわざ国家としてアクションを起こすほどの規模のものがやってくるとは思えない。たとえやってきたにし

ても、彼らは案外たくましいのです。なんらかの確かな当てがある限りにおいて国境を越える。よほどのことがない限りは国境を越えないということです。

あおられた対決の構図というのは、簡単にいいますと、次のようなことです。ちよつときょう、持ってくるのを忘れましたが、私、北京経由で帰りましたが、北京のメディアでも「タリバンへ報復攻撃」というのは、紙面の一面にありました。けれども、それよりも大きかったのは「飢餓の恐怖」で、そういうことを訴えていた。

爆撃に対しても、内戦になれていまして、十人、二十人死んだって、麻痺しているというのではなくて、驚かない。肝がすわっているんです。

一昨日の初めての爆撃で、カブール市民が動揺して、「ワット」と「さあ、逃げようか」という感じは、電話で話した限りでは全くない。むしろ、「安心した」と。いままで、彼らは大量爆撃を恐れていたのです。人口密集地帯をむちゃくちゃにやられると、これは大変だということ、数日間動揺がみられました。「どうもそんなことまでしないのではないのか。自分たちはそんな悪いことをしていないのに」という気持ちと、アメリカ側も軟化してきて、敵はただテロリストだけだということ

を明確にして動くのではないか、「いや、本当かな」というように疑心暗鬼で揺れていたのではないのでしょうか。

おとといの報復爆撃で、やっとそのことの確証が得られた。「やっぱりそうだったか」ということです。市民はまず平穏に暮らしているようです。別に私はタリバンの回し者じゃなくて、事実をいつているわけです。

一方で、大干ばつによる飢餓は深刻です。この冬をどうしようかと。当たり前ですが、もう、これは本当に死ぬのです。われわれ医者者が診ていて耐えられない状態です。空爆の下で静かに餓死を待つ人々がいるのです。

そうした中で、「きょう、第二波はこれだ。

軍事的効果は……」と、朝から晩までニュースが流れるのを見ておると、まあ、たまらないというか、私のような一介のヤブ医者が、記者クラブに来て、こんなことで話しているのも、どうも皆さん、事情がよくわかっていらつしやらないのではないかと。これはやっぱり知らせないと、傷つけたらごめんなさい——何かフィクションの対立の構図でもって、一方だけが盛りあがって、実際のところはどうかなどと、私、疑いを持つわけです。

他方で、静かに飢えてというか、死にかけている人がたくさんいるんですよ。こういう

人たちにどんどん食い物を送れと、懸命に声を発しているというときに、軍隊を送ってどうだこうだという議論を聞いていると、何かむなしくなるのです。

菲沢嘉雄（元日経） いろんな報道によりますと、タリバンは女性に教育の機会を与えない、それから職業にもつかせない。外出は男の人が一緒にでなきゃいけないとか、そんなことをやっているというんですが、どうして長老たちが、そんなでたらめなことを認めているのでしょうか。それからもう一つは、地雷がたくさんあるという話ですが、真相はどうでしょうか。

中村 タリバンの布告についての質問ですが、女性が外に出ないというのは、一般的な慣習なんです。特に若い女性は外に出ない。職にもつかせない。出る場合はブルカをかぶれというわけですね。

私たちの診療所にも母子衛生センターが二つありまして、そこでは女性が働いています。だから、女性の就業を完全に禁止しているというわけではないのです。

もちろん、そういう人を養成するためには、必然的に教育機関もあるわけです。それは確かに、タリバンが占領した数年間は厳しいも

のがありましたけれども、実際的に少しずつそうなりつつあったという面もあるのです。長老たちがやらせないというよりは、これは昔の習慣がわりと影響している。

菲沢 教育も受けさせないというのですか。

中村 教育、これも地域によって違います。例えば日本の国内でも、これは皆さんに怒られるかもしれませんが、少なくとも九州のある地域では、女の子が生まれてくると喜んでいた。ああ、教育費がいらないと。それと似た感覚があるんです。男の子はちゃんと育てて教育しなければならいけれども、「おなごに教育はいらないもの」なんて昔は聞いていました。それに似たようなものがあるんですね。それはまた地域によっても違います。

例えば、カブルなんかはわりと厳しいんですけれども、この職業は女でないとできないという仕事もあるんですね。助産婦さん、看護婦さん、それについては教育を認めている。あるいは、いい出した以上、取り下げられないけれども、あちこちでひそかに行われておる。まあ、黙っておけというのが、大半だと思います。

それから、東部のタリバンについては、こ

それは昔から女の子を教育する伝統があります。だけど、表向きはやるわけにいかんからということ、ペシャワールに送っている。ペシャワールとは密接な関係がありますが、あそこはアフガニスタンではありません。ですから、そこで教育を受けさせておる。こういうように抜け道がいっぱいあるのです。

つまり、本音と建前を非常によく使い分ける社会であります。建前だけみていると、人権活動家がトサカにくるようなことも多い。またタリバンというのはトリックがいえない人たちで、いわなぎやいいのということ、いっちゃうんですね。ですが、実際はずい分違う。先ほど話した「ハトの顔を隠せ」とかも、それを指示する役人たちがクスクス笑いながら「ちよつとばんそうこうぐらいで、先生、がまんしてください」。こういうことなんです。

だから、規制といってもかなり柔軟なものがあります。それは、人権活動家や外国の報道陣が行って、「これはどうなのか」というと、彼らだって宗教上の建前をいわなくてはいけないわけです。戦争中、「天皇陛下万歳」といわないと何事も通らなかつたように、何か建前をつくらないと公式にはものがいえないというところがあるのです。ですから、実際にはこうだ、というのがあまりに多

くて、そのへんは日本人はよくわかるんじゃないかと思えますけれどもね。これは大事な点です。建前ばかりが伝わってくるので。

私はあそこで活動した経験から、戦争中を除けばですが、世界で最も治安のいい国はどこかといえば、アフガニスタンは最もいいと思います。泥棒はいない。自転車はとられない。特にアフガニスタンの前の混乱を知る者にとっては、タリバンになってからはそうなんです。かつては診療所が襲撃された。ジューブも強奪される——結局取り返しましたけれども。われわれも強盗みたいに見えたでしょうね。診療所に機関銃を備えつけていたんですから。

そういう状態は完全になくなりましたから、これは現地の人にとってはかえがたいものがあります。ともかく食えて、家族が一緒にいて、平和な生活がしたい。これ以上の欲望は、タリバンも含めて、大半の人は持っていないと思います。

しかし、それだけの生活を保障するには、ある程度の規律が必要だったというのが事実であります。前の暫定政権はイスラム主義を同じように掲げながら——彼らもファンタメンタリストであつたわけですね——しかし実際にやっていたことは婦女暴行、略奪、市内での砲撃、これによる大混乱だった。あれは

本当のイスラムではない、と。一種純粹な、さらに純潔なイスラム主義を掲げて登場し、人々に説得力をもったのがタリバンであつたわけです。

みんな、行き過ぎはまあ……といいながらも、いまのタリバンがなくなる無政府状態をむしろ恐れている。だから、もちろん行けばハトなんかを隠したり、あるいは「たこ揚げ禁止令」とか、こつけないのもありますけれども、タリバンを含めて人たちが笑っているんです。過激な動きはだれも望んでいないということでもあります。

荏沢 地雷はあるんですか？

中村 地雷はまだたくさん場所に埋まっています。大体危険地帯とかは、住民は知っておりまして、住民の犠牲は非常に少なくなつた。まだ数百万発埋まっているそうです。

内藤茂（元NHK） タリバンとビンラディンとはどういう関係にあって、ビンラディンをどう評価しているのか。つまり私がうかがいたいのは、ビンラディンを今のタリバン政権がどう評価して、なぜ、ああいう形で守っているのかという問題です。それから、このようなテロが出る根源の問題を、どういうふ

うに先生は認識されていらつしやるのか。

中村 なぜ守るかということですが、これはおっしゃっていることと観点がちよつと違ひまして、もちろんイスラムの同胞であるという気持ちも、過激派の一部の中にはあると思います。けれども、現地では、人間社会のあり方を規定するのは「復讐法」ということと、さつきいった「客人歓待」なのです。これは農村の慣習法みたいなもので、何の法律もなくして平和にまわっているというのは、これがしつかりしているからなのです。

逆にいうと、農村を基盤とするタリバンにとっては、この慣習法を守ることが、自分たちの政權基盤の安定につながります。ですから特に客人歓待は重要なのです。ビンラディンはお客様です。日本でいえば国賓だ、といえば説得力を持つんです。あの国、あの社会では日本という国賓以上なのです。客、メフマンという言葉は特別な響きがあるわけです。それが一つあるということ。

確かにタリバンというのは一枚岩の政党とはちよつと違う。ああいう非常にセンセーショナルな発言をする宗教グループ、それから文字どおりのイスラム神学生である純粋な人たちが、これらはもちろん精神的な中核として存在します。その実務を支えているのは旧共

産政權の軍部、あるいは官僚といった人たちです。こういう人たちが、いやしくも元社会主義者あるいは自由主義者であった彼らが、そのままタリバンの政策を信じているとはとても思えない。

それから、さらに後で加わってくる農民のグループがあります。こういうのが一括してタリバンといわれております。が、タリバンの中でも、ビンラディンを嫌っている人というのはいくさんいるのです。ただし、それは客をもてなすという非常に強固な掟がある以上は、公にはいえない。

しかも、ちよつとアラブ諸国とアフガニスタンというのはまた違っています。対アラブ感情は必ずしもよくないのです。これはバキスタンでもそうですね。だれ一人、公にはいわないけれども、陰でどうかと聞くと、もうほろくそにいつていますね。

だから、彼らも外国人の一人とみなされているという事実があります。これは一概にはいえないけれども、公式には「守る」といわざるを得ない。その実は「あんな迷惑なのはちよつと出ていってほしい」。アフガニスタンは外国人の手によつてスポイルされてきたんだという感情は、これはタリバンも含めて一般的にあると思います。

それと、テロの根っこをどうやって絶つか

という問題ですね。まず、人々が悲憤にならないように、たらふく食わせることです。まずたらふく食わせて、自爆テロなんて、家族のある人ならみんな死にたくはありませんですよ。

われわれと同じように子供がいて、子供の死を悼むという人たちが生活しているのです。建前の主張がどうであれ、こういう感情というのは全く同じなのです。むしろ、日本人よりも、そういう人間的な感情というのは強いかもしれない。

そういう人たちが外からの脅威もなく、内からの脅威もなく暮らしていけるような状態をつくること、これがテロを防止する最大の方策だと思います。あるいは、テロリストに同調しないような人々をつくっていくには、それが一番だと思います。

アフガニスタンの人々の中には、ニューヨークのテロ事件を知って、人の死を悼みながらもどこかスツとした感じを持つ人がいるだろうと思います。日本人の古い世代の人、真珠湾から一連のことを覚えていた人たちの中にも、ひよつとしたら死を悼みながらも、どこかでスカッとしたものを感じた人がいたかもしれません。そんなことをいうとひんしゅくを買いますから、みんな黙っているでしょう。ともかく、あれだけの内戦でしたから、

肉親を亡くした人がたくさんいるわけです。まず、同情の念が先です。その気持ちをやはりわれわれは大事にして、まず「悲愴」な気持ちにさせないようにして、ともかく助けなければいけないと思います。まずはらふく食わせることです。私は、そう思います。

この冬、何十万人がおそらく死亡するというのは誇張ではなからうと思う。全力をあげてこういう犠牲を減らすこと。そのことで、その活動の中で、「やつぱりあの人たちは助けてくれたか」ということで、一つの友情が生まれて、テロ防止になっていくのではないでしようか。私はそう確信しますね。

外から見ておって、情報だけで「あいつらは怖いやつだし、やつつけた方がいいんじゃないの」というのでは、決して話はおさまらない。少なくともアフガニスタンでテロの芽を根源的に摘み取るということで、特に日本ができる役割というのは、たらふく食わせて友好関係を保つということにつきます。決して、彼らは日本を攻撃しません。私はそう確信します。

アメリカだって、爆弾だけではなくて食べ物——実際にはカブールとジャラバードには投下されていませんけれども、政治的なポーズにしろ助けようとしているのですから。それによって、彼らの気持ちをとかした

方がいい、と私は思います。過激な主張というのは、これはイラン革命と同じように、すでにみんなそういう争いを好みませんから、いずれ彼ら自身が変わっていくと思います。

春名幹男（共同） 大変貴重なお話をどうもありがとうございました。最後に、先生のこれからのご予定を。

中村 これは全く個人的な事情で、しばらく半月に一遍、行ったり来たりということが続くと思います。しかし現地には二百数十人の強い味方と、井戸掘り計画を加えますと、合計一千人近くのアフガン人の協力者がいるわけです。彼らが強力な味方となって、われわれの手足として働いてくれるわけです。基本的に事業は今までどおり継続します。難民キャンプでの活動は基本的にしない。それよりも難民をつくらない努力が先だということです。すでにカブール市内、特に死にかけている人々が集まっているカブール市内で、大規模な救援活動を始めました。

昨日ときような爆撃で、かえって爆撃のやり方がわかった。安心したということで、これは十分できると思っています。われわれ十七、八年現地に根をおろしているのです、どこがどうだというのは手にとるようにわかるん

です。地元との根の張った関係を通じて、有効な援助ができるということです。

日本の皆さんと協力して、ともかく一人も殺さずに冬越しさせるということを実現したいと思っています。そういう協力を呼びかけて、最後にしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）（文責・岩崎）

〔十月九日（火） 司会 春名幹男企画委員〕

ベシャワール会 一九八三年、中村哲医師を支援するため発足したNGO。①募金活動②広報活動③ワーカー派遣などを行う。現在、ベシャワールの基地病院のほか、アフガニスタンに八カ所、パキスタン山岳部に二カ所の合計十診療所を置く。二二〇人で年間二〇万人を診療。会員数四、〇〇〇人、年間予算一億一億五、〇〇〇万円。事務局〓福岡市中央区大名一〇〇二五 上村第二ビル307号 電話092（731）2372

2001年9月27日(木)

質実剛健で 用心深いフランス

山口 昌子
(産経新聞パリ支局長)

十年以上もパリを拠点に、特派員活動をしている山口さんは、在日フランス大使館での国家功労賞の授賞式のため一時帰国した。この日は米中枢同時テロ事件を話題に、フランス人のものの考え方、フランスの特異性を語った。大陸にあつて、千年余りも大国の地位を維持している底力が、何によるかを示してくれた。

私、ちょっと今、もう逃げて帰りたいくらいなのです。大先輩がいろいろいらっしやいまして、非常に話しにくい。もうちょっと、ふだんでしたら、えらそうに話せるのですけど。ちらっと拝見したら、私のデスクだった平野光男さんがおられる。二十代のころ新聞記者のイロハを教わった増田れい子さんも、それから渡辺修さんとかがいらして、ちょっと恐れをなして、困ったなあ、と実は思っています。

本当にしどろもどろになっちゃうんですけど、私がパリ支局で見たり、体験した中から、フランスの特異性とか、日本との差とか、アメリカとはここが違うとかいう、そういうことをお話したいと思います。

今回、テロの事件があつたわけです。あれは九月の十一日ですので、きょうで二週間以上たつたわけです。あれを例に引きながらまずお話したいと思います。

フランスという国は、皆さんご存じのように保革共存で、シラク大統領が保守党で、ジョスバン首相は社会党です。しかし、外交と国防というのは「一つの声」といっているわけです。フランスにとっては国益というものがもちろん大事なので、いくら保革共存でも、外交と国防はつねに一つの声で話すということがいつも強調されます。

それから、何か国際的事件とか、あるいは国際会議とか、いろんな問題があるとき、必ず意識されるのは、フランスのポジションということですね。ポジション、要するにフランスの位置です。

アメリカ一国主義への反発

今度のテロが起きたのは、フランス時間で午後三時ちょっと前、午後二時五十八分ですか、そういう時間に起きたので、もちろん朝刊は出てしまっています。夕刊は、ル・モンドですが、もう締め切っているから間に合わないわけですね。

テレビはすぐ放送を始めましたけれども、新聞は翌日、十一日付の朝刊、ル・モンドは夕刊です。翌日の日付にするのですけど、十二日発行ですね。そういう状態で伝わったわけですね。ふだんフランスの新聞というのは、アングロサクソンに比べると速報性では劣るのですけれども、あのときはやっぱり、一面全部写真でつぶすぐらいの勢いでした。

ル・モンドは社説で「ヌソン・トゥス・アメリカン」といったわけです。「我々はすべてアメリカ人である」と。それはどういうことかというところ、つまり、フランスはアメリカ側につく、テロに対して断固と戦うという、

こういう姿勢なわけですね。

フランスは特に冷戦後は、アメリカが超大国になって、一国主義になるということに非常に反発しているわけです。ですから、例えばジェノバ・サミットでは、地球環境問題などで、シラクはいつもブッシュ大統領にギャーギャーいつていたわけです。米仏首脳会談がジェノバ・サミットの間にあつたんですけれども、そのときには対立してけんかになる主題を避けたぐらいなんです。地球環境問題と、いまアメリカが進めているアンチ・ミサイル、この問題は最初から議題からはずしたんです。中東問題とか、なるべく一致できる議題を選んだのです。

ジェノバ・サミットのと看、京都議定書を批准しないアメリカを、一番批判したのはシラクですね。そういうふうには、フランスはアメリカのそういう一方的なことにはわりと盾突いて、いつもやり合っているのです。

全員がアメリカ人である

けれど、いざとなると、今回のテロのときもそうでしたが、「我々は全員、アメリカ人である」といって、アメリカと同じ民主主義の価値観、そういうものを標榜するわけです。それは今に始まったことではありません。

ドゴール大統領もアンチ・アメリカでした。特にルーズベルトがドゴールを大嫌いだったこともあつて、ドゴールはアメリカに対してはあまりおもしろく思っていなかったわけですね。けれども、キューバ危機のときなんかは、真つ先にドゴールはアメリカを支持したわけです。

ミッテランのときも、アメリカが西独にパーシングIIを配備するというとき、かれは社会党から初めて第五共和制の下で大統領になったのですけど、それに賛成したわけです。あのときは西独国内で配備に反対する運動が大変盛んだつたと思うのですが、そのときにいわゆる左翼の大統領であるミッテランが配備をすべきだといった。冷戦当時ですからね。それに対して、コールさんは非常に感謝したそうです。

ですから、フランスの基本的な立場というのは、いざとなれば、もちろん同じ価値観を持つアメリカと一緒に戦うということなんです。ご存じのように圧倒的に違うのは、ヨーロッパというのは中東と非常に近いわけですね。中東というか、アフガンにも近いんです。アメリカとか日本のように離れていませんから、今度のテロはある意味では身近な問題なのです。

それで、例えば十一日のテロの起きた日、

その日の午後八時に、シラクは何をしたかというと、テレビで演説をしました。どういう趣旨かというと、「私は、皆さん国民が不安に思っていると思うので、今、あなたたちを安心させる必要があるので、お話しします」というわけです。それで、すぐフランスは警戒態勢に入りました。駅、空港など人のたくさん集まる場所、そういうところは全部、いろんな警戒態勢の種類があるのですけれども、一番きつい厳しいレベルの態勢をしいた。

パリでは有名なビンラディン

私がパリ支局へ赴任したのは一九九〇年の五月だつたんです。その後すぐ、湾岸危機が始まって、湾岸戦争になったわけです。あのとき、フランスはやっぱり最後まで和平交渉というのを探っていたわけですが、最後はアメリカの旗の下で多国籍軍にいつたわけですね。そのときのことを思い出しますが、支局がお金持ちのフジテレビさんといっしょなので、シャンゼリゼにあるわけです。シャンゼリゼというのは、いつてみればフランスの看板のようなところですから、一番テロに狙われやすいんです。

今度も、狙われるとしたら、エッフェル塔とか、あそこに別に人がそんなにたくさんい

るわけじゃないんですけど、象徴的なダメージという意味で、シャンゼリゼとかそういうところが狙われたと思うんですね。

湾岸戦争のときも、いよいよ最後通牒の期限が切れてきて、フランス時間ですと、月十五日、十六日と、こうなるわけですけど、あのころシャンゼリゼのレストランなんか、人っ子一人いなかったわけです。

当時、ひしひしとした恐怖感を、私なんかも身近なものとして味わったんです。今度も、例えばビンラディンがどういうふうに身近かという、次のようなことなのです。彼は、サウジアラビアの大金持ちの一族からはもう離別しているわけですけども、その兄弟というのは五十三人いるわけです。あの九月十一日に、兄弟の一人がサウジの貿易委員会の代表としてパリにきていて、インターコンチホテルというのがあったんですけど、そこに泊まっていたわけです。

ビンラディンなんていうのは、パリでは、もう昔から有名というところですけど、フランス警察はその兄弟が来たときは監視をつけているわけです。だけど、普通のビジネスマンです。今度のこととは全く関係ないというので、そのまま十二日にその一行と一緒に出国していったらしいんです。そういうこともあるし、あと、パリの十六区という高級住宅

街があるんですけど、そこにもまたほかの兄弟の一人が、一年の半分は暮らしている。こういう状態ですから、問題が非常に身近なんです。

アフガンについても、アフガン戦争のときから、もうずっとフランスではしよっちゅう報道されています。だから、今度もアフガンに強い記者なんかは、みんな現地へ入っていて、生々しい映像を送ってきているわけです。西側の記者で入れるのは、もうフランスくらいなんです。イギリスとかアメリカの記者はなかなか入りにくい。フランスという国は、あんまり「二重国籍」という感じの国じゃなくて、何でもありという国ですから。そういう国ですと、やっぱり入れますし、いろんなことが、私はかなり客観的に報道できるのではないかと思います。

「身近にいるイスラム教徒」

ともかくイスラム教徒が身近にいるということは大きいと思います。だから、根本的にはアメリカと価値観を同じくする民主主義国としての立場なんですけれども、ただブッシュ大統領の例えば「善と悪」とか、「十字軍」とか、それから「生きていても死んでいても、つかまえてこい」とか、ああいう発言に対し

ては敏感に反論します。

やっぱり「十字軍」というのは、アメリカが建国前の話ですからね。アメリカはあんまり関係ないから、ああいうことをいつているんだと思うんです。ヨーロッパの人たちにとって「十字軍」なんて、そんなことは、あれは禁句ですね。「クロワサード」というんですけれど、あれはやっぱり、いつてはならない言葉というか、そういうたぐいの話です。

そういうのをアメリカの大統領が堂々といっちゃうというのは、フランスのインテリなんかには信じられない思いなんです。もちろん、フランスでもタクシの運転手とか、あるいはカフェのおやじさんクラスだったら、「アメリカはいつも大きい顔してるから、たまにはああいう目に遭うといいんだ」とかいふ人はいますよ。だけど、その種のことを、評論家とか、ある程度の人がいふことはない国なんです。

それから、湾岸戦争のときつくづく思ったんですけど、単純じゃないですよ。例えばあのころ支局のお掃除に来ていたおばさんは、モロッコの人だったんです。テレビで私がバクダッドがバンバン空爆されているのを見ていますよね。モロッコは多国籍軍でアメリカ側として参戦したわけです。しかし、おばさんは、テレビの画面を見て、涙を流して

いるわけですね。サダム・フセインは悪いやつで、もう悪魔みたいなやつだけれども、イラクの同じイスラム教徒がああ爆弾の下で殺されていると思うと、やっぱり悲しいというわけですね。そういう国情ですから、ちよつとやっぱり反応は日本とは違いますよね。ものすごく用心深いといえると思うんです。

それともう一つ、反タリバンのマスードがテロで殺されましたよね。あの人なんかは、ことしの四月にパリに来て外務大臣に会っているんです。そういうのがニュースで流れるから、ああ、この人はこういう人なのかと、わりと国民にとってもそういう存在が身近です。

彼が殺されたときの写真なんかも、すぐフランスの新聞には出るわけです。執務室みたいなところが爆弾でやられて、ガラスなんか飛んでいる。そこでテロが行われて、カメラマンに化けた人に殺されたわけですけれども、そういうめっちゃくちゃになった部屋の状態とかいうのが、すぐ報道されるんです。ですから、そうなのか、あの人はこの間外相をたずねて来た人だなと、こういう感じになるんですね。

私は、けさテレビを見ていてちよつとショックを受けたんです。話していることが人ごとのようで、確かに人ごとなんですが、それ

でも何か、テレビで若いきれいなお嬢さんが「……なんですよねえ」なんていう感じで話すのを聞いていると、何かちよつと違うという感じがするんです。もっと深刻というか、そういう問題ではないんじゃないかなあ、なんて思っています。これはよけいなことですけど。

またフランスは軍隊がありますから、戦争には敏感です。だから、今度も九月の十二日だったか、ル・モンドには、アメリカ軍がどこに駐留しているかが載るんです。世界地図が出て、インド洋、オマーン湾に何隻、地中海に何隻、アメリカの艦隊がいて、沖縄には何隻いて、兵隊が何人いると、全部出しているんです。アメリカの軍事状況が絵入りで出るわけです。矢印で、こういうふうにアフガンに進むとか、そういうくわしさなんです。私なんか、はじめはフランスというのはいわゆる文化大国で、グルメとファッションというイメージがありました。

何となく映画なんかで、恋とロマンの国のように普通思われています。ですから、最初にフランスへ留学して帰ってきたときに、「恋人でできなかったの？」とか聞かれちゃって、嫌になっちゃったんですけれど、そういうイメージが日本にはあるわけですね。

歴史的評価を吟味する態度

ドイツは、日本と同じで第二次世界大戦後、再軍備の問題とかいろんなことがあったわけです、フランスとしては、ヨーロッパでは自分のところは軍事大国だと思っています。ですから、戦争とか国防の問題にはものすごく敏感に反応します。今度も、すぐ、どういう作戦だとか何だとか、そういう具体案がものすごく出てくるわけです。アフガンは山岳地帯ですから、多国籍軍じゃだめだとか、いろんなことをいつているわけです。

それと、戦争に関してもう一つこだわるのは正当性ということです。要するに歴史的に後でみて、この戦争が正当と評価されるかどうかということに気を配るんです。だから、例えばNATOの集団防衛権ですとか、国連の憲章でも何条に正義のことがうたわれているから、この戦争は正当化されるとか、わりとそういうジュリテック、法的観点からもよく検討するわけです。この戦争が、後に歴史的に振り返ってみたときに、どこからみてもだれからも文句をいわれないかどうか。そういうこともやるわけですね。

もう一つ、フランスはよく国連の枠組みとということというわけです。どういふことを意味しているかというと、フランスはご存じの

ように常任理事国です。だから、アメリカだけじゃなくて、フランスにも意見をいわせろということなんです。

それだけでなく、フランスが国連の枠組みというときは、例えば軍隊を派遣するときに、その費用がどこから出るかということなんです。やっぱり国連の枠組みだと、国連からお金が出るわけです。軍隊を出すということは、湾岸戦争のときも思ったんですけど、ものすごくお金がいることなんです。

例えばボスニア紛争のとき、フランスでは五十三人死んでいます。負傷者は三百人以上出ました。ですから、彼らは人命にはかえられないとか、いろんなことをいいます。それと、日本が、例えば湾岸戦争のとき百三十億ドルか何か出したといいますが、後でフランスは全部計算して、フランスが軍隊を出したことによっていくらかかったなんて出すわけです。数字は忘れちゃったんですけど、軍隊を派遣して戦争するというのは、やっぱりものすごくお金がかかるわけなんです。

軍艦を出して、多数の軍人が乗って行くわけです。軍人にだって当然給料を払うわけです。フランスみたいに社会保障が大変ガッチリしていると、時間外手当とか、どうやっていいのか知りませんが、とにかくものすごい費用になるのは事実です。

フランス人の犠牲者約十人

おととい九月二十五日ですが、小泉総理がアメリカにいらして、ニューヨークの世界貿易センタービルのところを視察なさっていました。その前に、十八日にシラクが行ったんです。十九日から国連総会が始まり、子供サミットの予定がありましたから、シラクはジエノバで十分にブッシュと話せなかったもので、その前に二国間会談をやるということで日程が決まっていたわけです。ただ、子供サミットはテロで中止になったわけですから、米仏首脳会談はそのままやるということになって、シラクは行ったわけです。

それで、もちろんブッシュに、さっき申し上げたようにフランスの全面的連帯、ソリダリティということを表明した。フランスはアメリカ側について一緒に戦うといっているんです。それから、翌日ニューヨークへ行って現場を視察したんです。

あのとき、ニューヨーク市長と一緒にヘリに乗っているんです。そのヘリの上から、もちろんフランスの同行記者が何人か行っているんです。上から動いているヘリで撮った写真が紙面に載ったんですね。テロから一週間後ですけど、上から見てもくす

ぶっているし、そういう写真はあんまりなかったの、なるほどなあ、と思って見たんです。そういう演出のセンスみたいなものでも、小泉さんとフランスの大統領のマス・メディアの扱いというのがちよつと違ったのかなあ、というふうに感じました。

ちなみに、あそここのビルで死んだフランス人というのは少ないんです。大体十人といわれているんです。ドイツは百人ぐらい。イギリスが二、三百人。どうしてフランスは少ないのかなあと思ったんです。一つには、フランスはあんまり金融とかそういうことは得意じゃないから。

昔の日本人みたいで、あそこは農業国でもあるわけですから、口先三寸で、何かお金をもうけるということに抵抗があるじゃないか。だから、汗水たらす仕事に対して尊敬するようなところがあるわけなんです。金融なんて虚業ですよ。そういうのは何となく得意じゃない、ということがあるわけですね。

それともう一つは、多分、あのビルの家賃は高いんじゃないかと思うんです。フランス人は、合理主義というかケチですから、どうでもいいことにはお金を使わないんです。高い家賃を払って、見え張ってあんなところにいる必要がないと思う人がきつと多い。それにしても十人というのはやっぱり少ないと思

うんですよね。国連の常任理事国とか、大國とかいつている割には。

基本的な議論も忘れない

始めのほうでお話したように、フランスではイスラム教徒が多いですから、イスラム教徒とイスラム原理主義者は明確に区別しています。イスラム教徒はムズルマンというんですけど、イスラミストというときはイスラム原理主義者です。はっきり区別しなくてはならないわけです。

それから今度のテロとの戦いでもそうですが、地球環境の問題のときでも、フランスは一番に哲学的議論から始めるわけです。テロに関して、もつと基本的に考えようと。それはテロを認めるということではないわけですから、何でこの人たちがテロに走るのか。アフガンの、例えばタリバンの人たちはどうしてそういう考えになるのか。そんなことを考えるわけです。テロ行為が悪いことだというのを、だれも教えていないんじゃないかと、いろんな議論になるわけです。

だから、彼らにはそういうことを教えないではならないとか。あるいはテロは絶対認めないけれども、要するに全部が悪いというふうじゃなくて、その原因とかをつきとめて解

消しない限りは、これはただ爆弾を落としてもなくならないとか。テロを認めるということじゃないんですけど、そういう議論はすごくあります。だから、そのへんで、非常に哲学的にもなるし、いろんな文明の問題にも発展します。今はただ、日本は、テロとの戦いだという議論になっているような気がします。が、そういうふうな基本的な議論とかも大いになされています。(拍手)

質疑応答

W・ワグナー(司会・企画委員) タイムリーなお話をありがとうございました。

私もいま、ドイツの「シュピーゲル」特派員として、日本のテロ事件に対する反応を取材しているんですけども、山口さんの話を聞いていて、いろいろ参考というか、ヒントになりました。日仏の比較も興味深々かがありました。それで、これから質疑応答に入ります。質問は、テロ問題だけではなくても、何でも結構です。もう十年以上もパリで取材の経験をお持ちの方ですから。

川名宏(元朝日) フランスのマス・メディアについて少しお話をしていただきたいと思っています。

強くないマス・メディアの力

山口 パリのメディアって、基本的にはアングロサクソンとすごく違うと思うんです。日本のマス・メディアはアングロサクソンのだと思います。まずフランスではそんなにマスコミの力が強くないんです。日本だと、私も新聞記者を長くやっているので、何となく新聞記者って、朝日さんほどではないんですけど、大きい顔をするというか、かなり名刺の威力というのがあって、かなりフランスの場合は国家の権力が強いんですね。

それと、どのマス・メディアも旗色鮮明というか、もうはっきりしていますからね。ジヨパン支持とかシラク支持とか、立場が鮮明です。その点では日本のスポーツ新聞みたいですね。報知は巨人がひいきとか、そういうふうにはっきりしています。社会の木鐸とかいっていませんし、読者もそのつもりで読んでいますから、かえってよくわかるんです。ル・モンドなんかは、かなり今はジヨパン新聞になっていきますからね。これはこういう角度から見るとなあと、かえってはっきりします。

国家権力が強いんです。交通規制なんかがいい例です。偉い人が来ますよね。そのとき

日本だったら、ここを何時に走ってはいけないとか、すごく前からいろんなことを知らせていないと大変ですね。フランスですと、五分前ぐらいにお巡りさんが、人来て「はい、ここから、もう車はきようは通っちゃいけない」と。みんなは、もうしやうがないからう回していく。シャンゼリゼでも時々やつていくんで、しよっちゅう入れないわけです。

たつた。人で来て、パッとやつたつて、お巡りさんは国家を代表しているんで、みんなそれに従うわけです。そういうものだと思っ
ていますから。みんなやつぱり文句をいいますよ。だからといって、従わないわけじゃありません。私は、阪神大震災のときの状況を見ていて思ったんです。規制しないと、消防車やなんかも通れませんか。いざというときに、民間の車がバーツとそこを埋めていたら困りますよね。

だから、フランスは自由・平等・博愛とかいって、いすけど、そういう点では国家権力が非常に強い。そもそも、私は、日本人は少しフランスを誤解していると思うんです。フランス共和国というのは、もちろんフランス革命に端を発しているわけですが、さつき申しあげたように、フランスの国益というのを強いていますし、そのポジションを強く意識しているんですね。

プロと素人の区別は厳しい

メディア関係の話なんですけど、一番顕著な例を挙げたいと思います。日本ではこの間参院選挙がありましたよね。テレビで有名になったタレントさんとかなかなか、みんな高得点を取って当選しているわけです。ああいう現象はフランスではないんです。

この間、夏中、フランスではロフト現象というのが起きました。民間テレビの六チャンネルが起こした現象です。七十日間、ロフト、要するにバラック小屋——バラックということとちよつとイメージがあれなんですけど、そこに男性五人と女性六人を共同生活させて、最後に残ったカップルに百五十万フラン、日本円で三千万円ぐらいの家をあげるという番組です。二十四時間、カメラとマイクでフォロ—されていたわけです。番組をめぐってかんかんがくがくの議論になりました。いや、これは人間観察とか。いや、これはただののぞき趣味だとかいって。はつきりいうと、トイレは除いてですけども、キスシーンとか、いろんなのがあったわけですね。

その男女十一人の人たちは有名になっちゃったわけです。特に、最後に残った女の子なんてものすごい評判になったわけですね。

だけど終わってみたら、最初はすごくかわいい娘だったので、彼女にいろんな契約が殺到するんじゃないかと思われたんですが、モデル会社が一社だけ、その子と契約を結んだんです。

彼女がどういう職業をしていたかという
と、ディスコのゴーゴーガールだったんです。それがあのテレビ番組ですごく有名になっちゃったわけです。それでも契約を結んだのはモデル会社が一社。しかも、彼女が嘆いているのは、まだ実際の仕事はこないというんですね。そういうふうには、有名になっても、プロと素人の区別というのが結構厳しい社会なんです。だから、パッとテレビで有名になったからって、素人がすぐに何か使いものになるということではないんですね。

政治家は政治家で、やつぱりそれはプロとして通用するものを備えていないとダメです。国益を代表して国際会議でもかんかんがくがくやつて勝たなければならぬわけですから。そういうときに、元タレントか何かが行つて、官僚がいちいち教えていたりしたら、今の世界では通用しないんですよ。

日本だけああいふふうには、私はサミットを見ているとも思うんですけど、どうしていつもものすごい数の官僚が来るんだらうと。お役人にいわせると、みんな責任をとら

ないから、とりたくないから、この問題はだれにあの問題はだれに振るとかいつて、いろんな人がきて多くなるというんです。フランスではそういうことはないんです。大臣はみんな一人で飛行機に乗ってどこへでも行くし、車も自分で運転する。

原則、プライバシーは報道せず

たまたま南仏に行くとき見たんですが、向こうへ行く飛行機なんて一等も二等もないわけです。百人ぐらいいしか乗れない。通路を通っていくと、前の方に大臣がいて、ああ、大臣が乗ってるなあと思うと、その大臣は、カバンを広げて書類を出して、一生懸命勉強を始める。着いたら、お迎えの人が来ていたけど、スタスタと歩いて行って、迎えに来た人が車を運転してパーッと行っちゃう。そういう感じですから、だれもが本当にプロなんです。

それとプライバシーの問題です。フランスでは国益に反さなければ、プライバシーはあんまり報道しないんです。どうでもいいというか、それと、テレビにワイドショーがないんですよ。ニュースしかありませんからね。それから、週刊誌なんか見えていて思うのは、こちらだと、まじめな週刊誌でも、突然、女

子大生の何とかとか、ヌードの写真が載っちゃったり、水着姿が載ったり、いろんなスキヤンダルの話とかが載っているんですけど、そういうのはないんです。

まじめな雑誌は全部まじめ。あと、ゴシップ専用のものはそれだけで……。不思議なことにキオスクなんかで見ると、ひどい写真のものはほとんど英語なんです。旅行者がよく買って、日本人も買っていつて税関でひっかかるとかいう話があるんです。そういうふうに、マスコミもはっきり区別されているんです。

私はやっぱり、日本は区別というものが無いと思うんですね。素人とプロの区別もないし、政治家とタレントの区別もない。フランスの場合だと、政治家とタレントははっきり別なんです。雑誌も、かたいものとゴシップ専門誌というのは区別がはっきりしているんです。

フランスの新聞は宅配制度ではありませんから、キオスクで買うわけです。ル・モンドだって五十万部そこそこです。一番多いのが、ボルドーのあたりで出ている地方紙ですけど、それが八十万から百万ですから、つくる方も、だれでもが読める新聞とかをねらっているわけじゃないんですね。

ル・モンドなんか、私も本当に不勉強で、

記憶力も衰えているので、いまだに字引を引いて読んでいます。というのは、難しい単語がいっぱい出てくるんです。そういう難しい単語を使ったり、難しく書くことを誇って、競争しているのではないかと思うくらいなんです。私たちはしょっちゅうわかりやすく書けとか、だれでもがわかるように書け、とかいわれるんですけど、そういうことは全然考慮してないんですね。

それと、エリートというか、エリートというところと違うんですけど、フランスでは指導層と、そうじゃない人というのがはっきりしているんです。指導層というのはやっぱり責任がある。軍隊と一緒にすよね。例えば普通の兵士は、自分がどこに送られるかというのを知らないわけですよ。それは参謀とか何かが決めてやるので、フランスというのはそういう感じですよ。日本みたいに、民主主義で、平等主義とかいうんじゃないんです。だれでもが同じだなんて、だれ一人思っていない。だれもがみんな同じ能力だなんて思っていないし、学校ではちゃんと一番から何番までははっきりさせます。

ただいいのは、勉強のできる子は両親が全然学問に関心がなくても、先生がこの子ではできると思うと、どんどん進級させるんです。一年の一学期が終わったら「もう君はよ

くできるから、二学期来なくていいよ」といって、二年に進む。二年の一学期がすんだら「君はよくできるから来なくていいよ」のくり返して六年まで行っちゃって、それでエリート校に入るといふ人もいます。ちょっと話が飛んでしまったんですけど、そういうので、日本とは違う感じですよ。

細川隆一郎（元毎日）二、三、質問があります。第一は、今度のテロリスト問題はこういう形で収束するのか。とめ男がいませんから、大変なことだと思っているんです。

第二はシラク大統領についてです。あの人は女好きだ。日本にも四十五回みえています。日本の女性がどうも好きらしい。好きな女性は、今、パリにいるようです。名前はやめとしましょう。私はフランスのこういう粹、あるいはしゃれというものは、人間として学ぶべき点だと思えます。それだけではなく、シラクさんはお相撲も好きです。日本の古代文化にも通曉されているというのは大変なことだと思う。シラクさんは日本のことは何でも知っている。どうしてそういうことに興味をお持ちになったのか。

最後に、大統領選挙では、シラクさんが勝つかジョスパンが勝つか。世界のためにはどっちがいいか。フランスのためにはどっちが

いいか。日本のためにはどちらがよろしいか。そういうようなことを教えていただければ幸いです。

「シラクはみんなに「わが友よ」」

山口 みんなむずかしいお話で答に窮します。テロとの戦いがどういうふうに収束するかというのは、世界中の人が考えていて、頭を悩ませていることだと思います。とても私なんかはわかるようなことじゃない。さっきちょっと申しあげたんですけど、要するにフランスでは、例えばビンラディンをやっつけたから、それでテロの芽が摘めるのか、それで、例えばイスラム原理主義者が納得するのか、そういうことは非常にむずかしいんじゃないかという議論がされている。

例えば十九世紀のテロは、やっぱり貧しさから脱出するとか、いろんなことがあったわけですね。だから、テロに走る原因とかをもうちょっと分析するとか、どうして十九世紀のテロと今のテロは違うのかとかを議論しているようです。アメリカも経済封鎖とかいろいろ、試行錯誤という大変ですけど、そういうふうに行っていると思います。だから、このテロとの戦争はやっぱりすごく長期化するとみんないってますね。どういうふう

に束するかというのは、私の能力の範囲を超えていることです。

それから、シラクさんのことなんですけど、まずシラクさんが四十何回来日しているというの、私は女性に会いに来ているからだとは思いません。シラクさんはパリ市長時代から、パリと東京は姉妹都市なので訪日しています。市長を十九年もやっていましたから。それと、首相も二年間やっていますから、首相として来たこともあります。わがグループの宣伝じゃないんですけど、フジサンケイグループで世界文化賞というのをやっています。シラクさんはその国際顧問になっていますので、その授賞式が年に一回ありますから、そのときも来日します。大統領になってからも、国賓として公式訪問したりとか、そういうことがあるから、あの回数になっていると思います。

女性問題ですが、今、パリに行ったらやっぱりという方は、私も存じあげています。一般論ですが、女性にとっても、大統領と親しいということは、ある意味で商売の役に立つたりいろんなことがありますから、そういうのでいっていらっしゃる方もいると思います。大統領と親しいということは宣伝になりますから、そういうことを自分でいっている方もいると思います。別に、今、パリに行つ

てらっしゃる方がそうだというわけではないので、誤解されると困るんですけど。

それに、シラクさんは、ああいう気さくな方なので、会う人にみんな「シェーラミ」というんです。「わが友よ」というんです。みんな誤解しちゃって、自分はシラクと親しいと思ってるわけです。艶聞家という意味でなら、私はミッテランの方がずっとそうだと思います。

それから、よくフランスは、しゃれた国とか、粋な国とかいわれる。確かにそういう面もあるわけです。ミッテランのときですけれども、あの人は隠し子がいたわけです。ミッテランが大統領になったばかりのときに親しい記者とよくやることですけど、十人ぐらいの記者を呼んで朝食会をやった。ある人が「あなたは何か隠し子がいるそうじゃないですか」といったら、「エ・アロー」といったんですね。かれが「それで、何なんでしょうか」といったので、みんな黙ってしまっただれも書かなかった。書いても、何もおもしろくもおかしくもないので、書かなかったわけですね。

愛するに値する国土と文化

確かにそういう粋な一面もあるんですけど

ども、私はむしろ、フランスという国は質実剛健な国だと思っています。みんな、何かエスプリに富んでいるとかいいますが、私は、それはどういう実態を指しているのかよくわからないんです。あの国は本当に質実剛健で用心深いんですね。

だからこそ、千年ぐらいのヨーロッパの歴史をみていますと、イタリアで言えばベニス、ポルトガルの大航海時代があったりとか、大英帝国時代があったり、ハプスブルグ家があったり、いろんな栄枯盛衰がありますけれども、フランスは曲がりなりにも、現在も国連の常任理事国にもなっています。いまもって大国です。日本の人口の半分です。面積は二倍ありますけれどもね。国内生産力も世界の四位です。日本は二位です。

こういう国が、一千年、そういう地位を守り抜くということは並のことではありません。大陸ですから、ドイツと三回も戦争をやっています。ほとんど実質的には負けています。普仏戦争ははっきり負けましたね。第一次世界大戦もほとんど負けて、最後に勝ったわけです。第二次世界大戦なんて、あつという間に、一カ月ぐらいで本当は負けちゃった。だけど、ここでもフランスは最後に勝ってますね。最後にドゴールみたいな人が出てくる

とか。クレマンソーみたいな人が出てくるのか。それは本当に不思議というか、国のために、救国の士が出てくるわけです。それはやっぱり愛するにたる国土であり、いろんな文化が残っているわけなんですね。それはある意味ですばらしいことだと思います。

そういうふうに、自分の国が愛するにたる国である、ということはすばらしいことですよ。これを守っていかなければならない、という価値観とかも含めて。だから、フランスはすごくそういう意味で強いんだと思います。

大統領選挙ですけど、今、支持率のいいのはシラクです。かれには機密費問題があったわけです。日本で外務省の機密費が問題になっているわけですけども、フランスでは機密費というものは、偉い人はある程度使っていると思われるわけです。シラクが現金でいろいろ使ったのは機密費であるといったのは、あれは、つまりもう一つ、パリ市を舞台にした汚職事件があるからなんです。賄賂じゃないということのために、機密費であるといっているんです。

いまはジョスパンを上回るシラク

日本みたいにタレントが何か突然「先生」

になるようなことなら、みんなも頭にくるでしょうけれども、フランスはそれなりの人が政治家になったり大統領になっているわけですから、お上には下々のわからない苦労というか、必要なお金があるんだと思って案外納得するんです。シラクは、はっきりいうと、あの現金は賄賂じゃないということをいつているわけです。だから、あの事件があった後も、シラクの方が支持率がいいです。

それに、今度のようなテロでは、国家元首の方が有利ですよ。ブッシュさんも、いま支持率は上がっているわけです。いざ戦争になったときには、出る幕が多いという大変です。けれど、国家元首の方が有利です。

それと、ジョスパンの場合は、あの人はトロッキストだったという過去があったわけです。若いとき左翼に走るとか、そういうことは何の問題もないんですけど、ただ、かれはちよつとうそをついていたんです。うそをついてたということは非常にマイナスです。

五年前にル・モンドとやった会見のとき「あなたはトロッキストの過去があるといううわさがありますけど」といわれたとき、はっきり否定しちゃっていたんですね。「あれは弟である。自分は違う」といっちゃったんです。だから、うそをついていたということがわかった。

ただ、これも、国会でこの間認めたので、ジョスパンはプロテストメントですけど、カトリックはざんげすればいいわけです。それから、大統領選は来年の五月ですから、フランス人で社会党いきの人は「あれは別に何の問題もない」といっていますけどね。ただ、今の段階では、シラクの方が有利です。

渡辺修（元産経・フジTV）フランスに
いると、イスラム系の人たちというのが非常に身近な存在だというお話で、確かにそのとおりだと思えます。けれども例えばヨーロッパ全体の動きの中でみると、NATOがどんだん東の方へ拡大していく。EUも東へ拡大していく。そうすると、旧東ヨーロッパ系、特に経済的にかなり貧しい国々の人たちが、フランスやドイツや、ヨーロッパの中枢部に自由に入ることができる時代がやがてくると思うのです。そうした場合に、やはり人種の違い、民族の違い、宗教の違い、こういった問題が現在以上に厳しい時代というのが必ずくるんじゃないかと思うわけです。

それで、例えばフランスの場合、私もよくわからないんですけども、例えばルペン党首の国民戦線ですか——ああいう右翼が、要するに外人嫌い、クセノフォビア（排外心）というんですか、外人嫌いの傾向を持っているフラン

ス人というのかなりいるんじゃないかなあと思うんです。お隣のドイツでも似たような問題が、また別の角度からいろいろ論議されていると思いますけれども、移民法の問題も含めて、そういった外人の移民問題などに対してどういうふうに政府が見て、また一般のフランス人というのはどういった感じを持っているのか。そのあたりをお聞かせいただければうれしいと思います。

「三色旗とラ・マルセイユの下に」

山口 移民の問題は、ずっとこの数年大変だったんです。一時、確かにルペンの極右戦線というのが、選挙のとき一〇%近くまでいったことがあるんですね。

ただ、これは九八年のサッカーのワールドカップのときに、私は思ったんですが、フランスのナショナルチームの選手はほとんど、ジダンとかいろんな人を含めて移民なんです。アラブ系だけではありません。私も、なるほどいろんなところからの移民がいるんだなあと思ったんですけども、とにかくサッカーの選手というのは二十二人ですが、フランス人はほとんどいないんです。

もともとフランスは、フランスでもヨーロッパでもそうですが、名前を見ると、純粋

なフランス系の名前というのは珍しいくらいになっていきます。

ずい分前から、移民を、最初は労働力として受け入れた。あるいは冷戦のころには、もう東が嫌で逃げてきた人もいます。七〇年代には、経済成長を促すためにまた移民を入れた。あのころはこの国も経済成長が盛んでしたから、労働力が必要だった。その結果移民が入り過ぎちゃって困って、それでルペンみたいなのが出てきたんです。だけど、サッカーのときは、ジダンがルペンに勝ったといわれたんですね。つまり、移民と、みんな何となく思っていたのが、立派なフランス語も話すし、何といっても三色旗のもとで勝ったわけですから。

確かに、私が一番感動したのは優勝したときの光景です。顔を三色旗に塗って、よくやりますでしょう。あれだと、もちろんわかるにはわかるけれども、黒人なのか、アラブ系なのか、白人なのか、ああいふふうに顔を塗ってしまうと忘れてしまいますよね。はつきりいって、そういう感じですよ。だから、三色旗の旗の下と、ラ・マルセイユの国歌の下にまとまっているという感じなんです。あのとき、シャンゼリゼは百五十万人の人出だったんです。ぎっしり埋まったんです。あの現場を見た人たちは、だれもが感動したと思

うんです。

確かに冷戦が終わってイデオロギーの戦いがなくなったら、今度は、はつきりいえばキリスト教とイスラム教との戦いみたいになっているわけですよ。だけど、フランスが偉いのは、いつも、自由・平等・博愛と、スローガンを掲げて、それに近づこうと、やっぱり国家の理念というものがある。そのために、みんなが嫌なことでも努力しようと思ってい

るんですね。それは私だってはつきりいえば、例えば全く宗教も文明も違う人が隣人に来て生活されたら、やっぱり嫌ですよ。それでもそういう目標を掲げて、進むんですね。

どうしてフランスで失業率が高いかというと、百円、だれかに給料をあげようとする、会社は二百円払うことになるんです。フランスは、社会保障が国民総生産の四七%なんです。それって、ほとんど世界一高いんです。しかし、例えば子供が三人いたら、所得税はもちろんただになるし、学校は全部国立なんです。子供が三人いると左うちわとかいわれるくらいなんです。けれど、独身の私なんてものすごい所得税をとられています。

アフリカからの移民で子供が十人もいたりすれば、その人たちはほとんど何も働かないで、いろんな手当で暮らしていけるわけです。そうすると、こういう移民は帰ってもらいた

いと思いますよね。だから、しょっちゅうそのせめぎ合いがあるんですけどね。

ただフランスは、フランスに生まれた者はフランス人であるという、そういう国籍論が原則なんです。五、六年前ですけど、選べることにしたりしたんですが、ドイツは一、二年前に、フランスみたいに、ドイツで生まれた者はドイツ人にしたんです。その前まではドイツはドイツ人の血が第一で、ドイツで生まれたからだけではドイツ人じゃなかった。だからサッカーに負けたという説があつたりしたんですけども。それで、一年ぐらい前に変えたというのは冗談ですけど。

同化力の強いフランス文化

ただ、私、前にちよつと植民地のことを研究したときに、例えばアフリカにイギリスとフランスの植民地があるわけですよ。そうするとイギリスの場合は、植民地に、例えばナイジェリアならナイジェリアに大学をつくるんです。ところが、フランスではみんな、フランスに留学させるんです。フランスの大学に留学させて、フランス人にしちゃうんですね。イギリスの場合は植民地に大学をつくらせて、そこで教育をする。全然違うんですよ。だから、フランスはアルジェリア戦争のとき

も、どうしてああいうふうになっちゃうかという、何か愛憎半ばするという感じになっちゃうんですね。アルジェリア人がフランスに抵抗するときって、フランス人と同じ論理でやるわけです。フランスに習ったように、教わって抵抗しているわけですから、はたから見ればすごくおかしい。フランス人とそっくりなんですよ。ものの考え方とか。だから、同じようなことをいって、それで抵抗しているわけです。

フランスにいますと、だんだん、みんなフランス人みたいになっちゃうんです。アフリカの人なんかのストのやり方などを見ていても、そんな感じがします。何かそういうふうになっちゃって、みんなあそこにいる人は、フランス人になっちゃうという感じですよ。そうやって、フランスが栄えてきたことも事実なんですね。

例えばカルロス・ゴーンさん、あの人ははつきりいうとレバノン、フェニキア商人ですよ。だけど、フランスのエリート校のポリテクニク（パリ国立高等鉱業学校）出のすごい秀才です。もちろん疑うべくもなくフランス人ですけど。

そういうふうに、フランスというのは移民をものすごく同化しますよね。だから、サッカーのとき、本当にルベンに勝ったといわれ

た。ただ、確かにNATOも東に拡大しますし、今後はEUも、それがどうなっていくかというのは大きい問題だと思います。

ワグナー ゴーンさんのことをおっしゃったんですが、フランスの会社は、最近かなり日本に進出してきていますが、そういうことは向こうでもかなり大きく報道されるんですか。

表敬訪問はありません

山口 日産のときみんな危惧したのは、日産にすごい負債がありましたからね。ルノーも共倒れになるんじゃないかということでした。それと、あのときフランスから進出していた企業がすでにいくつかあったわけです。そのトップがそろっていったことは、ルノーは何でこんなことをやるんだ、と。日本とはカルチャーが違い過ぎるというようなことでした。みんな危惧しましたね。というのは、日本はトップダウンじゃなくてコンセンサスで決まるから、何でもものごとが決まるののろいし、だれが決定者であるかがわからない。そういうのをフランス人はすごく嫌うんですね。

フランスには表敬訪問というのはないんで

す。偉い人が何かするということは、もう著名してものを決めるときです。偉い人は決めないで、何だか知らないけど、いろんなことをやりとりして、どうなっているのか全然わからなくて、というのが日本だと思っています。だから、ルノーが日産を買ったときは、フランスではすごい冒険だといわれました。しかし、ゴーンさんが成功したということもあって、カルフルとかアクサとか、今はフランスの企業が進出していますよね。

埜呂義道（元新聞協会） 日本だけでなく、

世界でインターネットが大はやりです。しかし、それには多少技術的なことじゃない、別の問題もあるんじゃないかなと思うんです。本を探したら、フランスの本にはそういう問題意識のものがいろいろあって、いくつか見つけて読みました。頭から反対はむろんしていない。問題あり、ということを知っているわけですね。

それで思ったのは、日本ではやや前のめりで夢中な感じなんですけれども、フランスの新聞なりマスコミが、それについてどう論評しているか。フランスの社会学者がいろんなことを書いてるので、日本とは違うのかなという気がする、そのあたりのことを。

